アートによる新生ふくしま交流事業

アートで広げる

みんなの元気プロジェクト

2022

記録集

アートによる新生ふくしま交流事業

芸術活動を通して被災地の地域コミュニティの支援や心の復興を図る「アートで広げるみんなの元気プロジェクト」及び、子ども達に学校では体験できない創作の機会を提供する「アートで広げる子どもの未来プロジェクト」を実施しています。

アートで広げる 2022
みんなの元気プロジェクト

東日本大震災で浜通りの市町村から避難し、福島県内の復興公営住宅等で生活する皆さん、浜通り地域の皆さんと地域資源を活用したアート（作品づくり）を通し、地域の魅力を再発見するとともに、生き甲斐の創出や世代を超えた交流を図ること、そして福島県の「元気な姿」を県内外に発信することを目的とした事業です。

今年度は、いわき市を拠点に被災者支援活動を続けるNPO法人みんぷくのご協力のもと、郡山市と会津若松市の復興公営住宅でワークショップを実施したほか、みなみそうま 災害支援チーム「このゆびとまれ」、一般社団法人ちゅうりっぷ文庫（南相馬市）のご協力のもと南相馬市でワークショップを実施しました。講師には、県の被災者支援や文化活動の取り組みを理解し、賛同するアーティストを招聘しました。ワークショップでは、コミュニケーションとナラティブ（物語）を大切に、福島の風景や文化、暮らしの記憶などをたどり、味わい、表現する６つのプログラムを行いました。

CONTENTS

P2 Program 1

自分の思いをカタチに鋳造しよう

講師　黒沼　令

P6 Program 2

まちのポストカード・セット2022 をつくろう

講師　中村　ころもち

P10 Program 3

音からたどる絵本づくり

講師　寺島　知春

P14 Program 4

マイ・ストーリー絵本～ぼくのこころのかさこそおばけ～

講師　小原　風子

P18 Program 5

絹地を染めてみよう！～思い出の〇〇のイメージ～

講師　春野　修二

P22 Program 6

hal-fu のかさこそおばけ凧

講師　春風（hal-fu）春野修二と小原風子のふたりユニット

P26

みんなのアート作品展
（アートで広げる子どもの未来プロジェクト共同開催）

P28

プロジェクトの振り返りと気づき

Program 1

自分の思いをカタチに鋳造しよう

思い出の形ってどんな形だろう？
形のない思い出を粘土で立体にして、低い温度で溶ける金属を流し込んで鋳造します。
ふくしまの木の台座と組み合わせて小さな彫刻をつくりました。

2022.11.18 fri	郡山市 八山田団地・安積団地	
2022.11.19 sat	郡山市 日和田団地	
2022.11.25 fri	郡山市 八山田団地・安積団地	
2022.11.26 sat	郡山市 日和田団地・八山田団地	
2022.11.27 sun	郡山市 日和田団地・安積団地	
2023.1.6 fri	会津若松市 年貢町団地	
2023.1.20 fri	会津若松市 年貢町団地	
2023.1.27 fri	会津若松市 年貢町団地	

講師 **黒沼　令** Rei Kuronuma

福島県在住。福島大学大学院修了。郡山女子大学短期大学准教授。彫刻家。木彫制作に取り組む。2001年より国展に出展し、国展準会員優作賞など受賞多数。リアス・アーク美術館にて2018年に個展を、2022年には福島県立美術館にて展覧会を開催。人間とは何か、現代における人間を具象表現を通して探究している。大学では地域創成学科でアートの実技制作のほか、アートによる地域づくりに学生と取り組んでいる。2018年には福島県立美術館の創作プログラム講師を担当（2018年11月13日）。全国区で活躍する注目の彫刻家であり、県内在住芸術家の若きトップランナーである。

最初は皆さん大苦戦

先に進むほど思いが形になり

愛着の湧く作品に

思いをカタチにするワークショップは、今年度も3回連続で実施しました。会津若松市内と郡山市内の復興公営住宅に併設されている共有スペースをお借りして、4会場で実施しました。

初回は、自分の中にある思いを粘土で作り、石膏型を作るところまで。2日目は、鋳込みです。卓上コンロで熱した低融点金属を石膏型に注いで冷やし、金属を取り出して磨くところまで。最終日は仕上げ。「金属を紙ヤスリで磨くほどに変わっていくところを楽しんでください。研磨剤を使うとまた表情が変わるのでそこも。台座は、ケヤキ・タモ・アガチスの3種類から選びます。色も違うので自分の作品をどんなふうに置くかも考えてください」と、黒沼先生。早速、干支のウサギやダルマ、花瓶などを作り始めましたが、初回はなかなか思い通りにならず大苦戦。それでも粘土→石膏→鋳込み→磨きと、先に進むほど思いが形になり、どんどん愛着が湧いてきました。

《 参加者の感想 》

- 初めてで、何から手を付けていいのか?と戸惑いましたが2日目、最終日と、とても楽しくやり切りました。また、こういう機会があれば参加したいです。

- 今回は主人と2人で参加しました。参加したことで、笑いが家に帰っても絶えませんでした。楽しかったし、皆様との交流、とてもありがたかったです。

- 初めての体験でしたが、とても楽しい時間を過ごさせていただきました。また機会があれば、団地の方に声がけをして頂きたいです。

- たくさん笑顔になった3日間でした。初めての体験で楽しかったです。
- 色々、作品を作ってみたい。
- 楽しい3日間を過ごす事が出来て、嬉しい!

- 大変楽しかったです。心が穏やかになれます。
- 実家の青森からリンゴ送られてきました。アートを創るときはリンゴと決めておりました。先生、講義ありがとうございました。

- とても楽しく真剣に作る事が出来ました。
- 新しい体験ができ、良かったです。作品大切にします。
- 来年も、やりたいです!

Program 1

人と人の距離を近づける連続講座

それぞれの物語に耳を傾けながら…

半日ずつ計3回の連続講座は、富岡町・浪江町・大熊町から避難されている方々と、黒沼先生・ボランティアで入ってくれた女子大生・私たちスタッフとの距離が近くなっていくのも魅力。「みんなの顔を見るのが楽しみで…」と毎回、一番乗りで会場に来てくださった女性は、「避難先で80歳になったのよ」と、教えてくださいました。東京電力福島第一原子力発電所事故からこれまでの話を聞きながら、私たちは改めて皆さんが大変なご苦労をされたのだと感じ取りました。

大熊町が故郷と話す女子大生は、同郷の85歳の女性の話に聞き入っていました。その方は、避難先で亡くなった旦那さんと二人で、以前は大熊町で自転車屋さんを営んでいたと語り始めました。「去年も参加してヒラメを作ったの。今度は何を作ろうかなぁ。何も思い出がないからね…。たくさん自転車を売ったけど、自分たちのがないから自転車を作って遺影の隣に飾りたい。2台作れば二人でサイクリングに行ける(笑)」。女性は、ハンドル、車輪、サドルまでピカピカに磨き上げ、色の違う台座を選んで仕上げました。

手を使うことで心が動き始める。そんな非日常をみんなで分かち合ったワークショップ。和気あいあいとした雰囲気の中から、てるてる坊主やペンギン、インコ、愛猫など、たくさんの作品が生まれました。特に印象に残ったのは磨きの作業です。磨くほどにイルカは活き活きと飛び上がる程の勢いを宿し、落ち葉は深い質感が出てきました。つやつやに光るウサギの耳と尻尾に至っては、金属なのに手の温もりが感じられるような変化が。まさに黒沼先生のおっしゃる通りになりました。

Program 2

まちのポストカード・セット2022をつくろう

さまざまな紙を切ったり貼ったりしながら、
ポストカード（絵手紙）の原画を制作し、
印刷して「自分たちのまちのポストカード・セット（2022版）」を作りました。

2022.12.3 sat	会津若松市 年貢町団地
2023.1.14 sat	南相馬市 南相馬市民情報交流センター
2023.1.15 sun	南相馬市 南相馬市民情報交流センター
2023.1.28 sat	南相馬市 小高区復興拠点施設 小高交流センター

講師　**中村　ころもち** *Koromochi Nakamura*

千葉県生まれ。東京都在住。東京学芸大学大学院修了。アナログとデジタルの中間的イラストレーションや陶による制作を行う。玄光社『illustration』第219回ザ・チョイス入選。企画グループ展「on the table ～幸せな食卓～」@ondo galleryのほか、都内での展示を中心に作品を発表している。

思い出の風景や大切にしている物など

A４の台紙に原画を描いて

ポストカードサイズに印刷

色や光沢、模様、厚さ、手触りも様々な洋紙、和紙を切ったり、ちぎったりして台紙に貼ってポストカードを作りました。

テーマが「自分たちのまちのポストカード・セット2022」だったので、思い出の風景や大切にしている物を、具体的にして下絵の構想を練りました。制作の過程を短くまとめると、①A４サイズの厚手の画用紙に下絵を描く→②様々な紙から自身の作品に必要な紙を選ぶ→③下絵に合わせて選んだ紙をハサミで切ったり、手でちぎったりして貼っていく（約２時間）→④原画完成→⑤中村先生がポストカードサイズに印刷して完成です。

《 参加者の感想 》

- とても分かりやすく教えて頂いたので、楽しく出来ました。
- 参加するごとに皆様に会える日が多くなり本当にうれしいです。

- 高齢者で中々集まる機会がないので、こうしたワークショップを通じて、集まる機会があれば良いと思います。
- 丁寧に教えて頂き、皆さんからもアドバイスを貰えたので、完成することができました。

- やってみたことがないことをやるのが楽しかったです。使ったことない和紙などを触りながら作れたと思います。
- 大人も子供も夢中になって取り組めて楽しかったので、また参加したいです。

- 様々な材料を使い、周りの方の声を聞きながら楽しく制作することが出来ました。
- 鑑賞以外でアートに触れる機会は稀なので、とても楽しかった。

- 和紙を切ったりちぎったりして絵を作るのは、最近やっていなかったので、とても楽しかったです。またいつか、家にある画用紙や折り紙などを使って、貼り絵をやりたいな、と思いました。

- アットホームな雰囲気で楽しく制作出来ました。先生や他の参加者の方々の作品を見るのも、とても楽しかったです。
- 日常生活では分からない、新しい子どもの特性を発見できました。

Program 2

アートを通して出会い、聞いたり、話したり…

楽しい時間が明日の元気になっていく

子どもと大人が同じテーマで構想を練り、作品を作るワークショップ会場は、終始和やか。中には、当日飛び入り参加で、ポストカードづくりを楽しまれた方もいました。それにしても、ものづくりワークショップで毎回痛感するのが子どもたちの思考の柔らかさです。トマト、ケーキ、イチゴ、ウサギなど色とりどり、ポップなデザインが次から次と生まれます。紙にハサミを入れることも、入れる場所にも迷いはありません。あっという間に３枚も作ってしまう子もいました。もちろん大人も頑張りました。何を描こうか「ああでもない」「こうでもない」と、中村先生やスタッフ、参加者と話をしながら考え、紙選びや貼り方も談笑の中からヒントを得るなどして仕上げていきました。

展示会では、原画とポストカードを並べて披露しました。カラフルでにぎやかな一角には、大好きなカブトムシや小鳥、故郷の山並みや夕焼け、お地蔵様、大正時代に建てられ地域に愛され続ける映画館、若い頃に情熱を傾けたヨットなど、それぞれの思いと作る時の会話まで物語となって聞こえてきそうでした。

今年度のワークショップは、参加してくださった方々が、講師やスタッフにご自身のことを語りながら作品づくりを進めるシーンが多かったように感じました。共に過ごした楽しい時間が、明日の元気になっていきますように。

Program 3

音からたどる絵本づくり

音を使って遊びながら、1人1冊の絵本を制作しました。
会場には、普段あまり見かけないけれど、
誰でもすぐに奏でられる楽器が勢ぞろい。
物語になる一片を分かち合いながら紡いだ絵本の中で、
音と美術が交わる感覚を満喫しました。

2023.1.18 wed　　郡山市
日和田団地・八山田団地

講師　**寺島　知春**　*Chiharu Terashima*

絵本ワークショップ研究者／ワークショッププランナー／著述家。元絵本編集者の経験を活かし、2010年より絵本の専門家として各種メディアで執筆。東京学芸大学大学院で絵本とワークショップについて研究し、2020年に修了。現在は絵本とワークショップを多様な形で発信する。著書に『非認知能力をはぐくむ絵本ガイド180』(秀和システム)がある。「アトリエ游」主宰。

前半は、心と体をほぐして感じるワークと音遊びでウォーミングアップ

復興公営住宅の共有スペースで開催した寺島先生のワークショップ（約3時間）は、前半に心と体をほぐしながら感じるワークと音遊びを。後半の約2時間を使って絵本づくり、作品発表という流れで行いました。参加した皆さんから呼ばれたい愛称をテープに書いて胸に貼り、準備ができたところで自己紹介が始まりました。ご自身の名前のルーツを話す方もいて、一緒に参加した友人から「知らなかった」などの声が。ちょっとしたことで、これまで以上に互いの理解が深まったようでした。

体を動かしながら肺の中の冬の空気と気持ちをほぐすワークでは、自分の体が今どんな感じかを味わった後、声と動きにして全員で真似したり、見えない透明なボールを隣へ送り続けるワークなどを楽しみました。続いて膝の裏やスネ、足の甲など、普段意識していない部位まで両手で触り、呼吸とともに痛みを吐き出しました。皆さん、寺島先生のお題に臆することなく、非日常的なポーズや声を発していました。前半の最後は、目を閉じて寺島先生が鳴らす楽器の音を聴くワークです。マラカス、ギロ、レインスティック、カシシ、カスタネット、カリンバ、シンギングボウルのようなもの、カゴに豆を入れたもの、お菓子の空き箱など11種類から、どの音が好きかを味わいました。耳を澄ました後、寺島先生が感想を尋ねると、「運動会やお祭りを思い出しました」「まるで古いアルバムを見ているような気持ちになりました」「故郷が思い出されました」など、思い思いに答えていました。中には、涙ぐむ方も。こうした心象風景も絵本づくりのモチーフになっていきます。

《 参加者の感想 》

- 初めての体験でとても楽しく過ごせた事に感謝いたします。何でもやれば出来ることに気付きました。
- 初めてのワークショップで発想が出てこなくて困りました。
- 想像することから、絵に変わることに感心しました。
- 楽しかったです。
- 何十年ぶりに絵を描いて本当に心もウキウキするようでした。楽しかったです。
- 絵、「作」を体験したいです。

Program 3

困難を乗り越えて来た皆さんが音と美術が交わる瞬間を体感しながら紡いだ物語

休憩中にクレヨン、ハサミ、のり、2種類の画用紙を用意して、いよいよ絵本作りです。まずは材料作りから。個々に11種類の楽器を鳴らして好きな楽器と音、リズムを決めました。次にペアになって、決めた音を奏でてもらいながら、利き手ではない方で画用紙に自由に線を描きました。まさに音と美術が交わる瞬間です。たっぷり満喫した後、描いたものをいくつかのピースにちぎり、皆さんと交換し、絵本に使う材料にしました。

絵本の台紙は、手のひらサイズの蛇腹折りの画用紙（8面または16面）です。集めたものだけでなく、新たに描き足すなどして物語を紡ぎ小さな絵本を作りました。集中した後の作品発表は、宝箱を覗くようなイメージ。「春」や「HAPPY」、「宇宙創成」など、絵本のタイトルを聞くだけで歓声が上がります。ちぎったパーツから想像した音をQ&A仕立てにした「何の音」、春の風や夏の風に吹かれて種がまた花を咲かせる「風」、森の中で女神様に出会う話など、震災からたくさんの困難を乗り越えて来た皆さんの心の中から素敵な物語がいくつも生まれました。

Program 4

マイ・ストーリー絵本
～ぼくのこころのかさこそおばけ～

身のまわりのものや植物など自然のものの上に和紙を置き、
クレヨンなどでこすって浮き出た形から何を連想するでしょう。
不思議なおばけができるかも？
未来を紡ぐように、心の中のおばけちゃんに話しかけながら編んで
マイ・ストーリー絵本をつくりました。

2022.12.17 sat	南相馬市 ちゅうりっぷ文庫	2023.1.7 sat	南相馬市 南相馬市民情報交流センター
2022.12.18 sun	南相馬市 ちゅうりっぷ文庫	2023.1.8 sun	南相馬市 南相馬市民情報交流センター

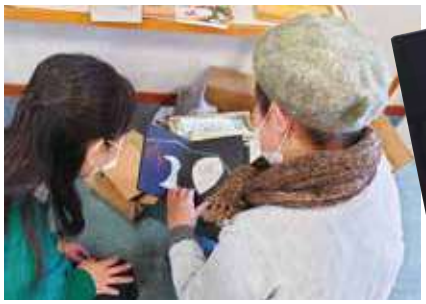
講師　**小原　風子**　*Fuko Ohara*

1971年、福島県生まれ、南相馬市在住。東京藝術大学で日本画を学んだあと帰郷。チルドレンズミュージアムや学童保育など、子どもたちと関わる仕事を続けながら、海のそばで絵や絵本の制作をしている。2012年『僕らの海』、2015年『もこもこ雲のテラドラゴン』（ともに自主出版）、2016年『ももいろのアルパカ』（ポエムピース刊）を発表。福島の自然との出会いから着想した作品を生み出している。南相馬を中心に地元のアーティストや活動家とのコラボレーションにも取り組んでいる。

参加者、講師、スタッフが一つの大家族のような雰囲気の中、日常を忘れて楽しむ表現アート

ちゅうりっぷ文庫と南相馬市民情報交流センターを会場に実施した小原先生のワークショップは、2歳の幼児から88歳の大人まで年齢性別不問。いずれも2日間の連続講座でしたが、1日だけの参加もOKという自由なスタイルで開催しました。

小さな子どもでも安心して使える蜜蝋クレヨン、筆圧が弱くても描ける色鉛筆（ダーマトグラフ）、いわき市の「遠野和紙」（手すき和紙）など、画材にもこだわったプログラムは、楽し過ぎて1日で絵本を完成させてしまった子どももいたほどです。ほかにも自宅に持ち帰って続きを考え2日目に臨んだ親子、帰宅してからもストーリーを考え続け、自分のイメージに合う葉っぱや英字新聞などを持参して完成させた大人、2日目にまた新たな物語を作り始めた子どもなど、参加者、講師、スタッフが、一つの大家族のような雰囲気の中、のびのび表現アートを楽しみました。



《 参加者の感想 》

- 面白かったです。割りばしなど、家にある物で出来ると楽しいのかなと思います。
- 初めて、葉を使用して絵本作りを行いました。子供たちも喜んで作っていました。

- フロッタージュするのも、絵本の登場人物・内容を考えるのも、とても楽しかったです。
- また今度、こんな絵本を作りたいなぁ…と思いました
- 大人も子供たちと一緒に、夢中になって楽しめました。

- 暖かい季節になったら、この地域ならではの景色を眺めながらスケッチできるワークショップも素敵だなと思います。
- 楽しいひと時、震災の疲れとれたようです。

- 自由に作品を作らせて頂いて、一緒に参加した方も楽しそうでとても良かったです。
- 今日のような「つくる」ワークショップをもっと楽しみたいです。

- じっくりと時間をかけて、作品に取り組むことができました。
- 久々に頭を使って、とても楽しかったです。

- 何も考えずテープや葉っぱたちをペタペタしているうちに物語が出来てとても楽しかったです。
- 地域の方との集いは、楽しいものです。

Program 4

完成した絵本を披露した後、

「今日はいい日だ。震災の疲れが取れました」

と涙ぐむ男性（88歳）

ワークショップ初日は、絵本の登場人物にする葉っぱ探しから始まりました。あらかじめ準備しておいた葉っぱの中から見つけたり、屋外に出て行って探したり…。たくさん集めたところで次はフロッタージュ（こすり出し）です。葉っぱの上に和紙をのせて表面をクレヨンで撫でるようにこすります。中には、小原先生が用意した無地のノートからはみ出すほど大きな葉っぱをフロッタージュした子どももいました。写しとった葉っぱを切り抜くと犬や猫、ウサギ、蝶々、女性の顔など、いろんな風に見えてくるから不思議です。それらを登場人物にして、ノートに貼りながらお話を考えました。

特に印象的だったのが2日目の最後、完成した絵本のお披露目タイムです。想像力全開で絵本づくりに挑んだ子どもたち。葉っぱと一緒に自作の短歌を記したり、詩や楽譜など自身の歴史も一緒に織り込んだり…大人たちも頑張りました。力作を広げて読み聞かせをする度、会場から送られる割れんばかりの拍手。発表の最後に「今日はいい日だ。スッキリしました。震災の疲れが取れました」と、涙ぐんでしまった男性もいました。理由を尋ねるとこんな話をしてくださいました。昭和8年生まれのその方は、「3·11の時は、（家は無事で）逃げればよかった」と。「しかし、時間が経ち88歳に。2021年と2022年の地震で自宅が壊れ、お風呂にも入れず途方に暮れた時に出会いがあり、今回のワークショップにも誘っていただいた。いろんな方と話をしながら楽しい時間を過ごすことができました」。日常から離れて半日ずつ2日間、ともに過ごしながら一つのテーマに夢中になり、完成した絵本を通して分かち合った喜びは、この先もずっと参加者の皆さんの背中を押す元気になっていくと感じました。

Program 5

絹地を染めてみよう！
～思い出の〇〇のイメージ～

好きなものをデザインし、
相馬野馬追の旗指物の技法をもとに、
絹羽二重で自分たちの旗やコースター、
あづま袋などを作りました。

2023.1.8 sun　　南相馬市
南相馬市民情報交流センター

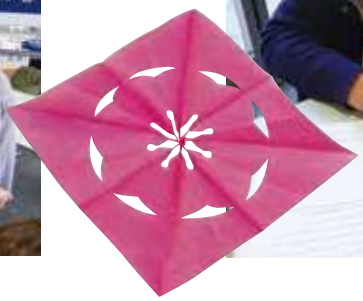
講師　**春野　修二**　Shuji Haruno

福岡県在住。福岡教育大学大学院修了。中学校美術教師、北九州市立美術館学芸員、教育センター指導主事等に携わる。その傍ら、第3回ベオグラード国際版画ビエンナーレ（1994）、さっぽろ国際現代版画ビエンナーレ準大賞など国際的に活躍している。近年は地域の子どもや高齢者とまちを歩き、土地の歴史や記憶を一緒に辿りながらワークショップや作品展を市民とつくりだすアート活動に取り組んでいる。震災後は福島での活動も開始し、現在は南相馬を中心に、浜通りでの調査とアート活動を行っている。

伝統技法で旗指物を染めていた市内唯一の職人の言葉を伝えることからスタート

相馬野馬追は、相馬地方で3日間にわたって行われる真夏の祭典です。毎年、約400騎の騎馬武者が色とりどりの旗指物（印旗）を風になびかせながら出陣します。旗指物に染めてあるのは、代々伝わる「旗紋」です。養蚕が盛んだった相双地方は、絹の旗指物が伝統です。布を縫い合わせ、調合した染料を表と裏に塗り乾燥させて仕上げます。以前は、南相馬市内に20軒ほど旗指物を扱う染物店があったそうです。より地域に根付いたワークショップにしたいと春野先生は、最後の1軒として「絹羽二重に友禅染」という伝統技法で印旗を染めていた西内清実さん（「西内染物店」2代目）を、事前に訪ね聞き取りをしてから臨みました。

小学生から大人まで参加したワークショップで春野先生は、南相馬の文化や西内さんの言葉「旗指物の生地は、絹に限る。風を切る音が違う」などの話をしながら、型紙づくりを始めました。



《 参加者の感想 》

- 色々工夫しないといけないことがたくさんあって大変だったけど楽しかったです。
- やったことがないワークショップを体験できて楽しかったです。

- 何を描くか考えるのが結構大変だったけれど、後から色々アイデアが浮かんできました。大変だったけれど、とても楽しかったです。

- 初めての染め物体験でした。悩みながら…楽しかったです。また、ぜひ参加させてください。
- とても楽しく勉強になりました。何度でも参加したいイベントです。

- 丁寧に教えて頂き、楽しかったです。ですが、自分のデザインを切り抜いていくときに想像しながら切ることが、難しかったです。

- 初参加でしたが、とても楽しかったです。また参加したいです。

- ワークショップを通して沢山の方と知り合う事ができて良かったです。

Program 5

楽しい時間まで閉じ込めた作品を展示会でお披露目

デザインは、紋切り型からスタートしました。折り紙を二つ、三つ、四つ、五つ折りにして、型紙通りに切り抜いて広げます。するときれいな花のデザインが現れました。もちろん染めたいものを手描きしてもOK！ 春野先生は、考える際のコツをこんな風に話します。「コースターや旗、ハンカチなど、作りたいものが出来上がったところをイメージして考えるといいですよ。干支とか好きな動物、食べ物、思い出とか、自分に引き寄せて考えると愛着が湧いてきます。ハサミや鉛筆を使って、実際に手を動かしながら考えるとよりイメージが膨らみます」。

開始から約1時間後、「桜とチョウチョの旗を作ります」「梅の紋切り型であづま袋を作ります」「シンボルマークをデザインしました」など、それぞれの思いと物語を込めたデザインが決まり始めました。次は、デザイン画を渋紙に写し取り、切り抜く作業です。実は、“染め”まで行う予定でしたが、都合で春野先生に委ねることに。そこで型紙を置く場所と希望の色をプランシートに記して春野先生に渡し、染め上がりを待つことになりました。後日、作品が届いた時は、皆さん満面の笑みでした。

今回、もう一つ記しておきたいエピソードがあります。それは『再会』です。春野先生は、2020年にこのプロジェクトで実施した、流木などを使って不思議な生き物を作るワークショップの講師でした。前回参加してくれた小学生姉妹が「また会える！」と、再び申し込んでくれたのです。感性の塊のような時代を過ごす姉妹は、大好きなカナヘビと異世界ファンタジー小説をイメージしたマークを考え抜いて仕上げました。展示会でお披露目した皆さんの作品には、共に過ごした時間、会話、春野先生のセンスも染み込んでいました。この先、眺めるたびに様々な形で、皆さんの時間を豊かにし続けることでしょう。

Program 6

hal-fuのかさこそおばけ凧

「絹地を染めてみよう！」の春野先生と、
「マイ・ストーリー絵本」の小原先生によるユニットワークショップです。
部屋の片隅で、かさこそお話ししながら
ひらひらと木の葉が舞うようなおばけ凧を作りました。

2022.12.17 sat　　南相馬市
ちゅうりっぷ文庫

講師　**春風（hal-fu）**

春野修二と小原風子の
ふたりユニットワークショップ

参加者が家族のように過ごす心地良い空間に

「ここは何人家族なの？」と尋ねる子ども

「hal-fuのかさこそおばけ凧」は、春野先生と小原先生によるふたりユニットワークショップです。南相馬市内に住む親子が参加しました。春野先生が作る凧は、紙とヒモとシッポで作るとてもシンプルなもの。そこで今回は、ひらひらと木の葉が舞うようなユニークな凧にしようと、和紙（遠野和紙）にフロッタージュ（こすり出し）して使うことにしました。

師走の冷たい空気をもろともせず二人の先生が待つちゅうりっぷ文庫にやってきた皆さん。一戸建て住宅のリビングに置かれた丸いテーブルを子どもたちが囲み、その周りを親御さんたちが囲みました。講師、スタッフもみんなが家族のように過ごす空気が心地よかったのでしょう。子どもの一人が小原先生に「ここはいったい何人家族なの？」と尋ねていました。なんて素敵な質問でしょう。安心してください。ちゅうりっぷ文庫では、集まったみんなが家族です。

《 参加者の感想 》

- 途中から参加になってしまいましたが、皆さん優しく対応いただき、とても嬉しかったです。

- 私たちでは、思いもつかない凧づくり、面白かったです。

- 子供たちが楽しんでいました。家でも、真似して作ってみたいです。
- 季節ごとのワークショップがあれば、また参加したいです。

- お話や凧を作るのがとても楽しかったです。

- 色々な葉っぱを探してみつろうクレヨンで葉脈の模様を見れたのでとても嬉しかったです。凧も、いろんな色で出来てとても良かったです。とても楽しかったです。

- どれもほとんど初めてやったことばかりだったので、楽しかったです。今度は植物を入れた蝋燭を作りたいです。

Program 6

竹ひごを使わない凧を心配する少年

「意外に飛んだので、びっくりしました!!」

ふたりユニットワークショップでは、最初に春野先生が、福島の凧『会津唐人凧』を紹介しました。次に葉っぱやどんぐり、蝶々のようにも見えるいろんな形の凧の型紙をテーブルの上に広げました。型紙は、もちろん春野先生の手作りです。たくさん並んだ型紙に子どもたちの目は皿のよう。興味津々。「葉っぱと和紙とクレヨンを使ってフロッタージュをします。いろんな色を重ねてこすってもいいですよ」と小原先生。続いて「こすり出したら葉っぱの模様をよ～く見てください。顔に見えてきたら目とか鼻を描いて好きな型紙に合わせて切ります」と春野先生。お父さん、お母さん、スタッフに手伝ってもらいながらこすり出し、切り抜いた和紙に目と鼻と口を描き、ヒモと薄紙でできた細長いシッポをつけていく子どもたち。出来上がったらすぐに飛ばしたい！早速、外に出て歓声を上げながら凧あげを楽しみました。

チラシで絵本づくりと凧づくりのワークショップがあることを知ったお母さんは、子どもが小さいので所要時間半日の凧づくりならできそうと思って申し込まれたとのこと。「楽しく過ごせました」と話していました。「うちの子たちは、三人三様。みんな性格が異なります。好きなように作らせてもらえたので、ニコニコ作っていました」と話すお母さんもいました。凧は、竹ひごが必須と思っていた少年は、本当に飛ぶのか半信半疑だったとか。「でも、意外に飛ぶ。ほんとに飛びました」と少し興奮気味に話してくれました。凧あげから戻った子どもたちのために、ちゅうりっぷ文庫の蔵書から凧の絵本の読み聞かせも行いました。最後まで和やかで、温もりあふれるワークショップとなりました。

アートによる新生ふくしま交流事業

「アートで広げる子どもの未来プロジェクト」「アートで広げるみんなの元気プロジェクト」

みんなのアート作品展

県内外で活躍する9名の講師とともに創り上げた、ワークショップ参加者の作品を展示しました。

会場のアンケートから

色々な表現が
あるものだなぁと
感動しました。
彩り豊かで自由な発想…
とても良かったです。

自分でも
気づいていないかも
しれない思いを形にして
表現するって、
素晴らしいと思いました。

各ワークショップの
取り組みがコンパクトに
紹介されていて、
良かった。

見ているだけで
楽しい気持ちになり、
機会があったら
やってみたいと思いました。

これを見て、
知らなかった世界が
有るのだと思った。

手作り・物づくり、
世界に一つしかない物の
良さを改めて感じました。

2023年 2月 4日(土)～ 2月12日(日) 会場：パセナカ・ミッセ　地域交流スペース(福島市)

2023年 2月15日(水)～ 2月21日(火) 会場：郡山女子大学建学記念講堂展示ロビー(郡山市)

2023年 2月23日(木)～ 2月28日(火) 会場：野馬追通り銘醸館(南相馬市)

皆さんの作品を見ていて
心動かされ、
元気になりました。

それぞれ個性的で、
その方の気持ちを
感じ取ることが出来、
大変良かったです。

自分の思ったように、
形にとらわれず表現する
素晴しさに感動しました。

すべての作品に
手づくりの
温もりが感じられ、
特に絵本はとっても
良かったです。

本当に様々な表現方法、
作品があって、
見ていて飽きが来ません！！

小さい頃から
大人になっても、
こういった表現する
場所があるって良いですね。

アートで広げるみんなの元気プロジェクト

振り返りと気づき

ワークショップを通して明日を生きる希望につながる

活動を通して見えてきたことは、人々の心の復興や未来に向けた成長とは普段はとても見えにくく語られにくいということです。子どもも大人も言うに言えない思いや記憶、願いを抱えています。それらは、もし尋ねられなかったならば、絵や彫刻、詩や写真などのアートが媒介しなかったならば誰にも共有されることがなかった思いであり、語りであり、人生の物語です。それがワークショップで初めて体験する表現方法や、アーティストや参加者らとの和やかな雰囲気の中での活動を通して図らずも形になって立ち現れてきます。これまでも、避難先で撮った当時小さかった我が子の写真をもとに版画を制作し、複数刷って祖父母に届け、成長の喜びを分かち合いたいという方がいました。帰還困難区域に戻って行った写真のワークショップでは、どこの風景を撮影に収めたいか皆で話し合ったとき、「俺の家…」と漏らす方、夜ノ森駅で日付の入った入場券を撮影し、故郷に戻った証を写真にして持ち帰る方もいました。今年のワークショップでは浜通りからだいぶ離れた場所に移り住んだ方が、金属を鋳造して自転車の小さな彫刻を作ったそうです。かつて浜通りで自転車屋を営んでいたとのこと。偶然そこにかつて同じ町に住んでいて、その自転車屋を知っているという大学生がボランティアで参加していました。確かにあの暮らしがあったことを知る人と表現を通して出会ったり、この十数年が着実に新たな希望を生み出しているということを表現の機会の中で実感したり、表現を通して人生を語り支え合っていく姿など、ワークショップを通して明日を生きる希望につながる出来事が生まれる場に立ち会うことができました。学校でワークショップに取り組んだ生徒たちも、思い出がつまった街の風景を描き、地域の自然や風土を色や形に置き換えながら新たな見方でその良さを再発見したり、過去、現在、未来がつながっていくことを様々なアートの体験を通して感じ合うことができたのではないでしょうか。今年は南相馬市を中心に拠点となる場作りにも取り組みました。まちの復興が進むにつれ、人々に寄り添いながら共に人生の意味を紡いでいくためのアートによる場づくりがますます必要になるはずです。ここまでの成果と課題を踏まえながら、継続的な支援と新たな仕組みづくりを皆で模索しながら具体化していきたいと思います。

（事務局　笠原 広一）

アートにこそ心の復興を成しえる力がある

「震災を恨んではいない。震災がなかったら、皆さんに会えなかったじゃないですか。このワークショップに参加して皆さんに出会えたことが嬉しい。」と、今年度参加された最高齢の88歳の男性が涙ながらに話された場面が目に焼き付いています。

心の復興。震災から数年経った頃から聞くことが多くなったこの言葉ですが、皆さんはその意味をどのように考えているでしょうか？その解釈は個人個人で違うと思います。

ただ言えることは、心の復興は様々なものとのつながりの中からしか生まれないということです。

アートとは、作品を作ることが最終的な目的ではなく、人と人を、人と地域を、人と歴史をつなぐ、そのためのツールなのだと考えています。特に、こんなにも様々な経験を経てきた人々をつなぐことが出来るのは、アートならではだと感じています。

今年度の事業では、拠点づくりと今後の担い手づくりをしたいと考えて事業を行いました。拠点づくりとは、一過性のワークショップを行うだけではなく、継続して創作活動を行い、人や地域とつながることが出来る場所をつくることです。場所と人の輪の拡がりを図りたいと考えました。担い手づくりとは、将来にわたり心の復興を図るために、アートに携わる担い手を増やすことです。時間軸の拡がりを大きくしたいと考えました。

場所と人の輪と時間軸を大きくする。今年度だけでは、なかなか目に見える成果は上げられませんでした。ただ、ワークショップをお願いした講師の小原さんが南相馬市の作品展の会場で急遽ワークショップを開催し、その日にたまたまいらっしゃった愛知県の大学生が参加する等、当方が想定しないアートでの拡がりが図られました。地域で人の輪をつなぐ活動を行なっている方々との連携協力が生まれたことで、今後の仕組みづくりにつながる人と人、地域や活動団体とのつながりが動き出したことは貴重な成果でした。これらは地域に根ざした取り組みの次の足場になるはずです。

東日本大震災による東京電力福島第一原子力発電所事故により、これからの日本が抱える様々な問題を先取りすると言われている福島県。これからの時代は、多様な考え方や生き方を認め合うことが大事になります。ただ、その認め合うことの第一歩である他者とのつながりが年々希薄になっていました。福島では原発事故により、一層顕在化したと思います。

その福島で本当の心の復興を図るには、様々なものとのつながりを支援する取り組みが必要だと感じています。それは、アーティストやスタッフをはじめ、ワークショップ参加者の皆さんにも感じていただけたのではないでしょうか。

３人のお子さんと一緒に参加されたお母さんから、「アートは人生の岐路において必ず役立つ」と親戚の方から教えられて参加したと伺いました。アートにはもう一つ出来ることがありました。アートは、人と人生をもつなげるのです。

私たちは、福島の皆さんに、アートを通して、人と人をつなぎ、人と地域をつなぎ、人と歴史をつなぎ、人と人生をつないでもらって、福島に生まれ育って良かったと思ってもらいたいと考えています。そうすれば、必然的に心の復興が図れるのではないかと思うのです。

（認定特定非営利活動法人ドリームサポート福島　事務局　菅野 真）

芸術は人生の節目で必ず支えになってくれる

3.11の年、長女は３歳でした。二女と三女は、震災後に生まれました。３人の子どもたちには、「たくましく育ってほしい」と願っています。子どもにワークショップをすすめるようになったのは、私の叔母の言葉「芸術は人生の節目で必ず支えになってくれる」がきっかけです。震災前から長女を連れていろいろな子ども向けのワークショップに参加していました。2020年の春野先生の流木アートのワークショップの時も、子どもたちに経験させたいと思って参加しました。今回、春野先生にまた会えると聞いて娘たちがとても喜びました。

ワークショップの魅力は、親にはできない経験をさせていただけるところだと感じています。目のつけどころとか、引き出し方とか…違うなぁといつも感じます。親が広げられないところを広げてくださる感じです。コロナ禍だけでなく日々の生活でのストレスを、アートがリセットしてくれる部分もあるように思います。長女は、受験を控えて毎日緊張の中で過ごしているので、その緊張を日常から離れてワークショップに参加することで、頑張れる力をいただいたように思います。

（2022年度開催のワークショップ会場にて　南相馬市在住　高野 泉穂さん談）

アートによる新生ふくしま交流事業「アートで広げるみんなの元気プロジェクト」2022

制作・編集　認定特定非営利活動法人ドリームサポート福島
デザイン　有限会社デザイニングマーブル

主　　催　福島県
事業受託者　認定特定非営利活動法人ドリームサポート福島

【お問合せ】
認定特定非営利活動法人ドリームサポート福島
福島県福島市三河北町2-8 Coco Mezon1階B室
TEL 024-563-1955　FAX 024-563-1955　E-mail info@f-jdi.com

主催：福島県

事業受託者：認定特定非営利活動法人 ドリームサポート福島